



中村俊定文庫  
文庫 18  
47







元日れやうきほんのもを明け東きく  
 のに際けさくとおれ日影乃は其の  
 かを免るみるこえらうけき



目録くすもあまののあたは  
 よひの年乃くくびきあまらゆつ  
 もあまらるまなまかたあまらるまなまかたあ  
 人あまらるまなまかたあまらるまなまかたあ  
 其あまらるまなまかたあまらるまなまかたあ







まゝ覚悟し今折もめれこやうとかな  
何れをばうへえとてひいへんはは  
うかるとはうのうもまゝまゝ  
思ひあ人侍らぬま

かゝりやうぢいはに結まゝ  
六日まゝなりあるう書れあはけ  
まゝと明<sup>あけ</sup>らじうら花のよる

まゝまゝ十うみらゝあるまゝ井侍

中はうり侍

神あまのうら十里乃いそ井月

子見れ小松ほるいづひとつみわき

おらう侍

姫書とてのひれやも免が君

七日のよ草をじう孝ある人乃侍

えいめふあうらうあるさばりし

ん侍り書れん



さるはほむさうし人をもんまひれ  
毎れさうりさる日

つふふとともやとあ海ざり柳さか

七葉のたうりかうともやとなぬのむ

あゝともや生どふるこのあけけり

七病とけりやわづ那さいともひう

くよ又振乃わうりひらちとるあひんはる

ともむのともくよの昔今や花はけり

物とりの目とつとふまわて

おるるとや物とる海とるともま

かま茂乃さげらやうんり海とるをけり

親吾常とゆゆのともとめたもまは

うこ此機あうりほちさく海ら井作

程りしろ此森の陰よりたもや物乃

きいともかきりやうりてたあもあひり

きいともかきり



左義忠のほろろるるまきしとやーお  
 たる福の竹のみどりや阿さねらやう  
 さねらやう乃竹もやあねむかもしや  
 三球打のほろろる紫<sup>しほ</sup>紙<sup>し</sup>とたるくほろ  
 音<sup>な</sup>かこしし音<sup>な</sup>るるけあめいいう  
 くまねほろろはく千<sup>ち</sup>ぬ日<sup>ひ</sup>の月<sup>つき</sup>とくはる  
 なるるまきしとやう移<sup>うつ</sup>火<sup>ひ</sup>乃<sup>の</sup>えとるひるようま  
 とあつとやうー

ちういとやまめと史<sup>し</sup>をほろろらやう  
 ちう地<sup>ち</sup>もやひあつとなる三球打  
 左義忠のほろろるや<sup>や</sup>燗<sup>あつ</sup>乃<sup>の</sup>まひあつ  
 三球打の帯<sup>おび</sup>もひう音<sup>な</sup>かほろろる  
 さねらやう乃<sup>の</sup>帯<sup>おび</sup>や燗<sup>あつ</sup>のひとむらび  
 ほろろらやうかこしし音<sup>な</sup>るるやひは<sup>ひ</sup>禮<sup>らい</sup>  
 左義忠のほろろるまきしとやーお  
 加<sup>か</sup>茂<sup>も</sup>乃<sup>の</sup>じ<sup>じ</sup>は<sup>は</sup>ほろろらや<sup>や</sup>竹<sup>たけ</sup>や火<sup>か</sup>神<sup>かみ</sup>鳴<sup>なり</sup>



左義忠やさんど海やがる神のお  
おもす記やとんごんやと三徳寺  
三徳寺をうらみたるのひらりれ  
せいこう記をきこやうの史やあざん  
とくに十めん記あきまふまな  
あき事ふくめりあき海てかくるり  
なるさ海りきよはうぬゆどもよき云  
出りける事なまばうら<sup>ひそ</sup>うんもはを

うみかきとめ侍なめば入てんあいの  
よてと命なまじりあき今むとついで  
よ記白もやあんとはまらうぞおかく  
なまやあに<sup>そ</sup>かちるあき事一のこい  
る記しうにけりあきげらるるあひ  
よまなぬあまきり物記あき  
あきしうにけりあきしうにけりあき  
あき人のあきしうにけりあきしうにけり







梅枝さうりかなるし流の正忠那ーど  
二三人んよまうて。教白くろー侍るふ  
名よまきくぬ梅花とやちてこの枝  
十短しゆん巻とやまやきやくある屋とれむじ  
かゝ結の扇風をん侍る

くもれいとやえうれー梅枝たむじ  
ミラ女よーそりてい未央えいのやるがいー  
い田原たはらの帝乃高侍たか寄ともい流り先さき下した

ぬひく花ばくーこはあをせぬく  
つやもほ集まいまいん侍るいずないく  
けさういひいの鳴るい候い侍りて。

嘗乃海哥やあまも花つー  
そらいくいあいばいといじいきいんいえいく  
さいらいたいじいちい目いりいないわい入い海いついる  
まい海いづいのい世いもいれい事いもいあいん  
清いがい細いもいのいらいりいまいくいぬいりいー



るぞかき立てはるま

後じりのおうもあうぬ角一後か

十又日一

うる海くもかーうーうる海くもかー

海くもかーうーうる海くもかー

き備の母かうせーうーうる海くもかー

はるまーはるまー

あーあーあーあーあーあーあーあーあー

あじきそそそに温ぬん解ん一入日の那

あううれーあううれーあううれーあううれー

あううれーあううれーあううれーあううれー

あううれーあううれーあううれーあううれー

あううれーあううれーあううれーあううれー

あううれーあううれーあううれーあううれー

あううれーあううれーあううれーあううれー

あううれーあううれーあううれーあううれー















なまふおがうらあー

信のほこもどもいほくはまはま

信くひくをやおやちお乃ぶつん

行やなほくをいりてあはま

あまこくあまく塩密の明神とくた

くーあするま吉乃敵のわくく

いあまいあ

とあるけよんくまうらあ

はのあんだうめんまく横とらんるるふ

塩がうらみらの若まがうめたかん

あう園りまうてあまいいんかう

の二庭あーまそかんくはま

ありまらるるあまらるるたじり

清らあ

あまやちん乃あまは乃あ

あままらあまの肉あうくあ







よー望まじ数なるふ花の影あ那  
祇園まうあそび若侍<sup>井</sup>のやどり村ぬ乃  
後とわるとも、れ常<sup>しづ</sup>ちまどおとー海  
くり言ふるり

しとびぬる落やふびぬる犬<sup>かい</sup>ぶく  
やうーやうへまゝ茶やの花たぶら  
大原よ海うまゝ

あひなやるうおかまゝれいせざら

花の本むとあり。うりうあまうし見<sup>ま</sup>橋なむ  
やう乃作<sup>えんぎ</sup>の短母<sup>えんぎ</sup>うりうたゝ付を言ふるふ。  
又り常そへ侍まゝ

見さくくうーがきうー二白<sup>ま</sup>心はく  
室<sup>むろ</sup>にぬ吟<sup>ぎん</sup>の教<sup>しやう</sup>ふ

を花はうー花<sup>か</sup>のま<sup>ま</sup>や路<sup>ろ</sup>や見<sup>み</sup>さくく  
くくみく花の枝と人<sup>ひと</sup>り<sup>り</sup>言<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>侍<sup>しやう</sup>く  
あくやだが袖<sup>そで</sup>うーくくぬ乃<sup>の</sup>しとくら







と教白なむまのいまじうんをうび侍らす。

庚寅の早具り

えひれそや侍務の御<sup>ご</sup>花乃鏡餅  
とも丸のころりーまじのありと白れら  
二白なぐう阿まるとまこ通きやう坐のむれと  
まけまなむーもんくーび侍らすや

花を惜むる今の人乃阿るまばはくふ  
いあくる中一がねるあぐーは太山<sup>えん</sup>君

独三

ははると言んーそあもまきながれう  
まらかう花ん入ーま頂帳とたまきあーと  
はへるまらあひむらうわれ神もが那や  
このくあもようとおしるーは人のかれま  
うれまはははらけま又まはあれまら  
まもなれまがとまごうま

わーとんく物もえいもぬ花ら  
あまちのむらとがなまら花をうけま

二六



吾々和國は風土を傳うるまはつるはたそ  
ろーと物なきでゆゑに讀るをばと  
くやまゝしてやうき花は月よまをど  
のちれをおそ傳へるがらん河の  
せんを傳へんとがれ誰をの庭洲抄は  
も傳へおどやうしくんひるをば  
川だんやうもくもくめばうう  
かゝるんをさういひおどるにひ

まゝにけつまゝあつてむきうりやと思ひ  
傳へなきは花似塚といふや

地をまゝいはまゝをうらむと思ふ  
をばよとてなびとてうらむをば  
んるしやまが胸をそつた傳へるを  
きんあまをぬるる名をその海を  
さるるにけつなきをばとひとひ  
物なきをさういひおどるにひ



のゆるまのまのしきくをめぐりてありく  
人ろんるんごやまーはくをふりす  
ぶくもおほくはたのは母まくとあり付  
はとく

移てんるや通介なごうのひさく  
らりくあやひくはるれやうはく  
日吉の山を懸ーはく  
山を乗やいらんさくははるん

志が尖山とらぐら波あをる花う那  
余吾のうらやま母うらにくか  
やうひに日く概の花を人のをほのいさん  
とくまれりふらとゆるまが果ごら  
はるるをれまごのうらりちるねだるい  
て此校のえごをぢらぐひくゆとふら  
うらひのゆにくかさうねもといんは  
きよじがさうらまごはるさんぶとわら



推任

えーとふたりやうで泳めぬはらうー福よ  
めくもをたらやうあをむな何そび  
いんけなうらうー時うりあざらあひくさび  
らうけきぶむつれ事ーせーなうりたうーあ  
つざをけらにらうりあういづきううらこ  
ろぶゆとそむづがらうーきこがらぶーも  
あーうづゆれうき事ーもーうらうー此の  
ふゆいひよく何れまも身とよららるら

ふゆいひよく何れまも身とよららるら  
よあちるぬえいふとくかくほうなぬゆとらうの  
なるまーいんらるをけるとかうりてあや  
えんたひひちりあざらうー今この口ずさひを  
もあまへんむらふあなうー花やあれんまき  
とづらぐんぬらういぬう務つまぬ信をのづ  
しうそあうりたわびて選者其あだのーと  
選者まらううれーめり又うのいんさといふ

曲三九



うきうきとあはれどとくなく  
あはれとくなくとくなく  
あはれとくなくとくなく  
あはれとくなくとくなく  
あはれとくなくとくなく  
あはれとくなくとくなく  
あはれとくなくとくなく  
あはれとくなくとくなく  
あはれとくなくとくなく  
あはれとくなくとくなく

ふきのたより

句とさるるし 枕のさるるし

かどくくやきぢらるるし  
はくくくやりのいんぶふら  
いぢくくしきくはくやと  
物おのしるるし  
枕原より舟はとやたたり三日の月  
蓬葉の山よりまたとくや



なごたろん織りうらぬくまぬへ海あり  
侍りうらぬの事

うら人乃あそぶふゆをほくもの  
花よとあう三日の月影日といひま

若菜のしらべうらぬやふり鏡  
と川はあそぶかたてゆるりうらまに  
むらうらふうら踏音うらうらうらり  
よむそくうらの泳草紙あそくうらひは

扱らるるごとくあそぶすうらむびは  
福をあそぶうらあそぶうらうら侍り

うらうらと氣をうらむ福人の桃も  
うら事いともあそぶうらうらひあそぶ  
と又なうらむうら事いともあそぶ  
元日ちがうらあそぶ世の人うらうら  
あそぶうらうらと申りうらうらあそぶ  
うらあそぶうらうらあそぶうらうら



らうはういふもやうにしていふもあつたことなり  
らういふことあつたことなりかたなりなり  
なまじくいふはゆるいことなりいふは  
きふ人なまじくいふはゆるいことなり  
もあつたことなりいふはゆるいことなり  
きふはかりなりなりなりなりなりなり  
らういふことなりなりなりなりなりなり

せんせんいふはゆるいことなりいふはゆるいことなり  
人の事なりなりなりなりなりなりなりなり  
はゆるいことなりなりなりなりなりなりなり  
はゆるいことなりなりなりなりなりなりなり  
はゆるいことなりなりなりなりなりなりなり  
はゆるいことなりなりなりなりなりなりなり

きふのや何なりともいふはゆるいことなり



雨の降るけりし朝暮を

毎夜夢に見たりや梨花のまじり

雲山よみ

やもゆきや雪よふかきけりし朝

長寺にけり尾張のノ身とまゝゆき人

非徒無事侍りしうみらては又探

起りけりしをとり侍り

風のよもなきともはふれおぼし

かた後よりゆるま

ふふ紫極香いびやうんれはど

後んよりゆるんとあり申しなごり

井よりいよとえゆるるまけるは

ふふやうやうれきふりけりぬら

日のつらひらわゆるんりし時入まらける

よふかきゆきすくこの中より平三郎

みくまゆゆきくせうふ人れおぼし



又柿の皮はなまじうらよむひのきき  
えいごまを煮くしうりあしごはくを  
光原氏の喜海は乃まひのあもち思ひ  
やうきくひなぬあしうりくはく

花うぶすこやあざしりしりうりうり  
あなとあまこゆう人あまは定百韻を  
白まにく物しはるまを名白りころと  
尺さしそはをゆるるうりやとそはうけ

あゝまたいんげんをこくしうけはくしうりや  
なごひひやうはくはくはくはく

慈恵とくさあまのはくもや  
大谷う揚らわうは師乃りとはくも由  
あふりくはひ侍りし時

揚らとんからく陰のりし井の部  
る骨子より骨雲れまを流らまはくは  
あゝくまや鞠やあまよりあま



うたひの神の心と海とをいへばいふ所の心  
やうひの海はうり

雲は名もつらまゝにひげやうかろくれ  
ゆゑはまゝにうかろ柳のうたひ  
いふんだう開帳乃は

いぬんまゝいふまゝにうたひ  
卯月朔日ある清く西の山麓にうたひ  
海はうたひにうたひにうたひにうたひ

まゝにうたひにうたひにうたひにうたひ  
の神さびにうたひにうたひにうたひ

たゞにうたひにうたひにうたひにうたひ  
山にうたひにうたひにうたひにうたひ  
乃極保の卯の花はうたひにうたひにうたひ  
まゝにうたひにうたひにうたひにうたひ  
たゞにうたひにうたひにうたひにうたひ  
向あまへのなまゝにうたひにうたひにうたひ



人の御書よりくつある

まうのや新<sup>ひ</sup>あまのまうの花は  
力とうらうの申<sup>ま</sup>終一人乃<sup>り</sup>仰り  
よめいなるは<sup>は</sup>御書<sup>の</sup>年なるも  
なる物なるは<sup>は</sup>御書<sup>の</sup>年なるも  
まうのや新<sup>ひ</sup>あまのまうの花は  
力とうらうの申<sup>ま</sup>終一人乃<sup>り</sup>仰り  
よめいなるは<sup>は</sup>御書<sup>の</sup>年なるも  
なる物なるは<sup>は</sup>御書<sup>の</sup>年なるも

いふ御書よりくつある  
まうのや新<sup>ひ</sup>あまのまうの花は  
力とうらうの申<sup>ま</sup>終一人乃<sup>り</sup>仰り  
よめいなるは<sup>は</sup>御書<sup>の</sup>年なるも  
なる物なるは<sup>は</sup>御書<sup>の</sup>年なるも  
まうのや新<sup>ひ</sup>あまのまうの花は  
力とうらうの申<sup>ま</sup>終一人乃<sup>り</sup>仰り  
よめいなるは<sup>は</sup>御書<sup>の</sup>年なるも  
なる物なるは<sup>は</sup>御書<sup>の</sup>年なるも



いざぬく百物ごとくせんぞいことなげとも  
世になし一もやうあまきやあつとよれよ  
あつぬ物もやうのあつひもあつみあせ  
ていもあつていれあれいあつてい  
たがるもやうなうあつていあつてい  
いあつていあつていあつていあつてい  
いあつていあつていあつていあつてい  
いあつていあつていあつていあつてい

るくもあつていあつていあつていあつてい  
くくくあつていあつていあつていあつてい  
いあつていあつていあつていあつてい  
いあつていあつていあつていあつてい  
いあつていあつていあつていあつてい  
いあつていあつていあつていあつてい  
いあつていあつていあつていあつてい  
いあつていあつていあつていあつてい  
いあつていあつていあつていあつてい  
いあつていあつていあつていあつてい



あしはらほらうきをたもく  
糸はらうきとしてめはらうき  
おきうきなどおきくえり  
さまうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり

あしはらほらうきをたもく  
糸はらうきとしてめはらうき  
おきうきなどおきくえり  
さまうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり

あしはらほらうきをたもく  
糸はらうきとしてめはらうき  
おきうきなどおきくえり  
さまうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり

八日

あしはらほらうきをたもく  
糸はらうきとしてめはらうき  
おきうきなどおきくえり  
さまうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり  
おきうきなどおきくえり











海こそうらなひつゝ海に本世アノキうらなひやをまらう  
るりちるくならんごあしむかろお井くねれあり  
おるといふわよまひもほごあしむらなひきよな  
あつて一夏の河をえそつつぎ越はたかぞろり  
ほしひまくにまゆもあつてまいつくほごの  
日くすぞやほまごうの花ごごころぬれ  
夕たれたたらむかのあさごしつるりちるり  
くまごのなる一終りを悲あむねるをそめれ有たり

をしそまゆのまゆりちるりあつてま  
くほうにめよせごまらそくまちやま  
とろりあつてまゆのんとそま思ひ侍うり人  
なごりぬらもあつたおきくむつくるなご  
やうもなごりうり人にそま侍うり  
あつたをほして知つて申うるなごまたご  
さる志のちるるうりごらそまあつたご  
てあつちと思ひよあつとそまうりつあつる



物をとるやうはくぐと思ひはくぐもつれまて  
やがて賞とるまゝかばくぐもつれまて  
は升りくまらやと侍り

名をいれまきめんくぐはくまきめ  
まやぶの花乃くまらなるは

花乃くまらまやぶ父乃くまらかまきめ  
意去まはくぐ侍り  
くまらまやぶ侍り

毎法少く侍り侍り日

ひくまらなるまぶのたひくかまきめ  
毎法りくまらまきめ侍り侍り  
名のりくまらまやぶ侍り侍り  
世のりくまらまきめ侍り侍り  
山一なまらくまら智天由まら侍り侍り  
侍り侍り侍り

あかまきめまきめ侍り侍り







あつ花ちどよめよれるまよひりころ。  
いとうまうしそめもんあつあつげさろ  
くねーあまうろりかなとゆるはまうし一俺つ  
きまふ枝なごつひさうごきめうまよて  
らまきんばもぐりいちうごうまよせどがれ  
親のうかまはくくや海のうねれどく  
あつ牡丹とあつろり人のとせみりころ。  
うらうめくあだらのめとにん

名とるまごさあ徳やあつにまごい坊

初うろり借一侍りよ

地義をうごまらりあつやあつだせん

やうんの花うり管れまごれろりまごん徳

管火をまごもすやうんをうりまごの

いとろりまけつ夕はうらねくちろりあだ

うり女ごうのうごくろり夕あろり管

花なとやうれくまごりあつ徳とゆらる



よげしうりまぎくしきうろあよ人乃何と  
よ一や一なうくむくかいたさるるしつづちま  
きんしそわくしきつじらま

つづちまをかくるまやよまひほ  
うげもるまやあづつづちまのひまそん  
まそいつかまうにくくまうひまを  
つづちまをまうくくまうまうくくまうとつづち  
ままうくくまうまうまうまうまうまうまう

おん

まうまうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまうまう

まうまうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまうまう

まうまうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまうまう

まう



ともしすゆかりぬちるぬや思人<sup>く思</sup>の世  
はしとて字<sup>じ</sup>紙<sup>し</sup>知<sup>ち</sup>る変<sup>や</sup>患<sup>えん</sup>のうぐめとてふも  
さる年<sup>ねん</sup>なりふえけちうらう一<sup>い</sup>時<sup>じ</sup>にうららの  
きうりいこくむらぬどひ一<sup>い</sup>と親<sup>おや</sup>たられ一<sup>い</sup>  
親<sup>おや</sup>へ<sup>へ</sup>働<sup>はたら</sup>く隣<sup>となり</sup>り有<sup>あ</sup>るうむむおりとむ  
くえぬるとぬとくはらう一<sup>い</sup>ちうらう一<sup>い</sup>漢<sup>かん</sup>の  
光<sup>ひかり</sup>とやとくむらう一<sup>い</sup>て物<sup>もの</sup>とてふもなを  
さるうら一<sup>い</sup>定<sup>じやう</sup>侍<sup>しやう</sup>らう一<sup>い</sup>彼<sup>か</sup>はむうせとくこのらも

神<sup>かみ</sup>だたなり侍<sup>しやう</sup>事<sup>じ</sup>ふま<sup>ま</sup>がを隠<sup>かく</sup>居<sup>い</sup>よとてゆ  
ちとて<sup>かみ</sup>對<sup>たい</sup>あ<sup>あ</sup>るを侍<sup>しやう</sup>るを<sup>ま</sup>出<sup>で</sup>づらちまらちの  
侍<sup>しやう</sup>事<sup>じ</sup>侍<sup>しやう</sup>らう一<sup>い</sup>つことおらう一<sup>い</sup>むむぬと  
どるなま一<sup>い</sup>ひ思<sup>おも</sup>ひ<sup>い</sup>まうなう一<sup>い</sup>むむぬと  
さのむむらう一<sup>い</sup>あむらうと侍<sup>しやう</sup>らう一<sup>い</sup>の隣<sup>となり</sup>れ<sup>ま</sup>  
一<sup>い</sup>あなぬんちまらう一<sup>い</sup>そあやなまを<sup>ま</sup>つさよの  
らんむむ



いづれもあそく又ふと世にあらましと申毒  
よもなきもりけりしとぞたんとあそく敬父  
なる人のいとくひゆるとそく

つた竹乃けりとのんがねのちしつが  
白景独吟してまぬ丸へんせりましつ  
ひしと記がうと息とあそくをちちとそ  
てまぬけりしとそま記をえ侍りあつ耐  
正三平へ侍る

むしと記やうんまんとくるをらみださ  
まむちとやゆらがりともり麻子紙

とつひくアを侍りしをたつしとあは入  
侍るまろり

夏野ゆくののこや草花志はめゆい  
と口まのく侍るまろり  
理光院あらしめくやまのの紙をうとそく



あると井もくもみくはぞれあゝまぶ  
浮牛もまぶひきくまおやーまおま。  
いふてわがめくうまげくぬんとほげう  
はまほくいあこらこせるうほれ人まの  
まうんとうや。大武三位のくれきまうー心  
おるまなま事なまこ福くーやま  
なとのいたけうん実方中將のちつま  
民乃志くふるま守るる。あまうれぬの

うら紙だまこどー(言ん)そあま紙  
活のどーあやなうん六条こつりさり  
事あまーすーはやあんこーあまあ乃  
アおもんこぶるとまうけよ七き八えぬま  
あまこまこまあまこまじぶりのみら  
がやうもゆるーなまこまこまの  
れまあまのこまこまおまあまのま  
りーまこまこまこまこまこまこま



なまけきくれくをそそくゆる  
ぬぬ町まちやおれあやめと見えたり  
こころのあまぐりうらなめりけき  
くさるはえ侍りて

あやめおる  
うしなうそひきくくるははく  
くはくもひきくびくうらやめ

あやめく朝のあきくや蛇のうら  
あまぐりよこもあやめおる  
あやめくやぬき—いぶ目の風れき  
あまのくくくはえ侍りて

十五日今日宮へまきく侍りて

神事の時うらあやめく  
くまぐこよ人乃くはかまきくく











人様へ申す事柄のつれづれに  
あつたおぼつかさのつれづれに  
またいふ事柄のつれづれに  
はるる事柄のつれづれに  
らばらばらと申す事柄のつれづれに  
がらがらと申す事柄のつれづれに  
人の御心なりある時御心なりある  
らばらばらと申す事柄のつれづれに

あつたおぼつかさのつれづれに  
はるる事柄のつれづれに

あつたおぼつかさのつれづれに  
またいふ事柄のつれづれに  
はるる事柄のつれづれに  
らばらばらと申す事柄のつれづれに  
がらがらと申す事柄のつれづれに  
人の御心なりある時御心なりある  
らばらばらと申す事柄のつれづれに



を繋なすにらして侍りて又その癖など  
んづうも人乃前あつてくきとけらるゝ  
はらひまゝはあつてもんおんおと  
の<sup>わ</sup>後さりのきこひもあつていつうん  
のひひつらよ  
らめてもたぬのきこひもあつていつうん  
おはるのきこひもあつていつうん

作で給がぬまの舎らあつてあつた

やぶるなすも戒の理をもつらあつた  
んひのきこひもあつていつうん  
やき師れまゝあつていつうん  
のさへくあつていつうん  
ん後心もあつていつうん  
ま宗温法師のつたあつていつうん  
めははくもあつていつうん  
抱こもあつていつうん



いさくとも有らなく思ひおし侍

きりくらの水鏡やうのきり

みる月翔る

あはちとさきさきりくをむじはる

じつさやえええくひひらや

なだらけりてみく鞠乃有る

あせもも衣えん級なりけ鞠場う部

鞠もつづもいひのきりあを似る人

堪ぬかた海へもくつていさくとも

あつていさくともあつていさくとも

はあつていさくともあつていさくとも

はあつていさくともあつていさくとも

はあつていさくともあつていさくとも

はあつていさくともあつていさくとも

はあつていさくともあつていさくとも

はあつていさくともあつていさくとも



しだくせんしきまづあせんくせんくせんく  
傍影なまやうの事しんせんせんまうしんくの  
白れくろくもあしんがせなせんくせんくせん  
はくろくしんあなれせんくせんくせんく  
人まきしんくせんくせんくせんくせんく  
しんくせんくせんくせんくせんくせんく  
せんくせんくせんくせんくせんくせんく  
せんくせんくせんくせんくせんくせんく

せんくせんくせんく

せんくせんくせんくせんくせんく  
袂圍金の侍をきし侍るせんく

のりからせんくせんくせんくせんく  
世とせんくせんくせんくせんくせんく  
目せんくせんくせんくせんくせんく  
せんくせんくせんくせんくせんく  
せんくせんくせんくせんくせんく











夕だちやえつゝあるもくも成者もくち  
おる人のよしそ村ありぬりういさるふ  
蓮入もあまんとく霧なごうそよ出で  
るさうもあまはちりーそき海影にしくあ  
ゆぐと投あやくはしくひさうこと

しんさめあまもまこひあやまきん  
とくしー霧とわがまや蓮花漏  
ふさふさなまをれく大佛のほくく人をす

こいしはくちくの時

よのけしー花漏そりよまの池乃うめん  
おるー蓮入んいさうのまき人づきなひつ  
ゆの侍をく奥のたが確たがるううづきごと  
なとあるドーつゝ極くーもくくまき  
そ地をまじしゆか人乃あめこしく友勝  
のめー志きお人なりけきまもやうなる  
んちらひるうきーはちりー



一のころはけりしをちんろみ蓮華ト  
はがしほやなれどおかくえくつるをき  
はく思ひ侍りや

せんかろくきそくかほきる知蓮花  
人のめとらと敷るうきとよとひとせ  
ちるちるめんごくろ一尻をてふちうち  
侍りやまは

めんごくろくやちんでいそろ尻

めろく一の園やと守ゆる人を合楊よはさ  
のありあは常より白ひな記たごうみ侍  
ましとや今をのまごうりあを藤あく  
いと申しふかましくは尻すれごの多<sup>か</sup>あ  
なまひしきはひしを柳侍り尻  
あはき此の系物ましくあまらたをれま  
侍るあはま

ぐく秘りの毒者一たもやちごの尻



かく見たりとつごのやありなうとていつと阿ま  
まし米のゆふたはまにら景かどくち物部  
らぬ方のましるむきんぬんまはしと  
け急を足付て

河せしちうのせまなうてうらあうを

新橋より野のきかひつとまん付て

新橋にせまうむやニヤのがまめ

ぬあぶら

翠ひのやせまのやうが物ぶらり  
笑哉ふいの事付あうそくう海じ  
よまあぶらあう時社人右系れなふがとる  
ぶして石川やせまは小川をどくし付  
里ぬ昔女院のおらうとあう流のつと茶  
くして君はまは機あは物らうとあう森  
なるまらう主御門院のらと流するまわら  
此のゆめして付あうとあう流のこら流あひ



まぐよや石どくばうりも　　いさげつよら  
きほいさるひとりくさくはゆるふり  
あき今もいぬあがも林志つらうり蝶  
のおれとく良よかちるまききちり也  
はご後もの大將は源氏のこや乃陣り  
あきはうり琴のぬひりあうり也  
まやかしく思ひ出れゆるふまも  
いさげのひがを琴や獲とらむせもあはれ

雑言

と半ぬをせごりのつよと依路れあまの  
あきうあうれをうとゆるあうり

あまのけといはあうりはくはる  
とやうする事もけひぬ人あふ事  
と事なりゆるきとく人なごり  
みそが川もやじとびくおほい  
あま

あまのけあまのひもき　　あまのけあまの



ぬうばく返つてかひ　　やゆまゝ  
白哲教のり

おん　ひち夏と秋と花とさうひのぬ  
とくうまう此すゝとりの海んくく  
いふなまはそ乃日心也ふ戸孔橋の松原  
よつとまゝしてみそぶとくひ好ひる  
何あけはき出ーは神なまもたもやらん  
まゝてそく魚とくが中川洲のこま

らぬばりおりのもあはくくあといき那  
まはあまがたあうとがくくうらり  
海がまねわなうまとなりすふら諸法  
他万の原のやいん

波和気も身を清まるやみそび川  
おりふふこれつとせらうぎ何  
年とくふまんなかのこまふくく  
けすまの世乃人あら







